


 巻頭言

2020年、私が感じた虫たちの「異変」



大阪府立大学 ^{ひら}平 ^い井 ^{のり}規 ^お央

今年（2020年）は、サバクトビバッタがアフリカ東部や中東、インド等で大発生し、農作物を食い荒らすなど猛威を振るった。過去には1987～89年、2003～05年等にも大発生があった。このバッタについては、様々な研究がなされてきたものの、いつ大発生するのかはいまだに予測はできない。南米でもミナミアメリカバッタと呼ばれる種が大発生した。日本では森林害虫のマイマイガが各地で大発生したそうである。私たちの身近でも、昆虫を見ていると、いつもの年と何か違う、と思うことがよくある。今年は特にそれを感じるが多かったのだ、私の気づいた例を紹介する。

大阪府堺市にある私たちの大学キャンパスには実験圃場があり、私たちの研究室でも一画を借りて昆虫の実験や害虫のモニタリング、食草の栽培等を行っている。私が「昆虫畑」と呼んでいるその場所では、農薬は使用せず、野菜と水稲、一部果樹等が栽培されている。

そこで今年の春にまず感じたのは、アシナガバチ類の営巣が少なかったことである。たまたま今年からアシナガバチの研究を始める学生がいたので、キャンパス内で記憶にある営巣場所を巡って見たが、成虫を散見するものの巣は一つも見つけることができなかった。例年ならフタモンアシナガバチとセグロアシナガバチがハウスの周辺や建物の軒下に多数の巣をつくるのだが、これほど見つからないということは、やはり少なかったのだろう。葉の上を歩き回り、ガ類の幼虫を狩って、次々に運び去るこれらのハチ類が少ないことは、野菜の栽培にとって痛手であろう。後にオオタバコガやハスモンヨトウの食害が多いと感じたのは、このことと無関係ではないと思う。

害虫ではカメムシ類が多かった。例年は秋ごろから被害が目立つミナミアオカメムシをはじめ、ブチヒゲカメムシ、シラホシカメムシ類等が早くからトマトやナスの実に群がり、その後も高密度で居座り続けた。ホオズキカメムシは毎年見られるが、今年もピーマンで多発した。一方、いつもより少ないと思った害虫もいる。ナスで毎年のように多発していたニジュウヤホシテントウについては、今年はなぜか少なかった。また、農作物の害虫ではないが、いつもゴールデンウィーク明けから多発するヒトスジシマカが例年に比べて非常に少なかった。

梅雨期には、各地で豪雨被害が出るほど雨量が多く、期間も長かった。近畿地方でも7月いっぱい梅雨が続き、

7月の雨量は平年の2.5倍を超えていたようだ。梅雨前線は長期間にわたって本州付近に停滞し、大阪でも日々実感できるほど南風の吹く日が多かった。梅雨明け後の8月には一転して猛暑が続いた。このような年には南方系の昆虫が多発する。

予想通り、クロマダラソテツシジミが早い時期から現れた。このチョウはもともと熱帯から亜熱帯にかけて分布し、幼虫がソテツの新芽を食べる害虫である。2007年以降、毎年のように南西諸島から本州にかけて北上しながら世代を繰り返して分布を広げているが、冬季にはほとんどの場所で見られなくなる。大阪付近では、9月以降に発生することが多かったが、今年は8月から各地で見られるようになり、新芽の出ているソテツでは高頻度で加害が見られた。

9月以降にはウシカ類が多発し、各地の水田で坪枯れが目立ち始めた。私たちの小さな水田ではトビイロウンカなどが見られたものの枯死には至らなかった。収穫期には広範囲でイネの枯れが目立つ水田が見受けられ、かなりの被害が出たものと思われる。これより前に私が坪枯れを見たのは10年以上前のことであり、しかもこれほど多数の場所で見えたのは今年が初めてである。同じく南方系の水田害虫であるコブノメイガも歩くたびに飛び回るほど多く見られた。

このように、今年には多くの昆虫で例年とは異なる発生パターンを実感した。近年は気候温暖化によって、猛暑や豪雨等の強度や頻度が高まっていると言われる。もともと昆虫の個体数の変動は種によって様々であり、度々大発生を繰り返す種も多く知られるが、このような性質も気候の変化による影響を受けているに違いない。農作物の不作や価格の高騰が伝えられることも多かったが、植物防疫の観点からの貢献が期待される場面は今後増加すると思われる。

さて、9月下旬からは急に涼しくなり、圃場は一見静かになった。先日は大阪南部の山に出かけたが、この時期に咲いているはずのヒヨドリバナの花がすでに終わって枯れ始めており、期待していたアサギマダラの乱舞を見ることができなかった。違和感続きの今年もあとわずかとなった。来年はいろいろな意味で平穏であることを願いたい。

（関西病虫害研究会 会長）